

# 歩　　み　　來　　し

小笠原 秀 實

歩み來したきたきしさの一年を命の内に數へ見る今日

伸び伸びむ命なりしをあはれにもこゝまりすぎし年なりしかな

冬枯るゝこの静けさにしみくゝ山をながめてものを思はず

煙立つ炭やき山の冬木立追はれ追はれし心かくさむ

爐火のぬくみほこよくうつらうつら眼閉ぢつゝ冬の音を聞く

たえまなく埋火かきて暖まるこゝより外になきあはれかな

むらぎもの心たがひに照し合ふまばゆさ過ぎて秋の水聞く

たえまなき水のひときのひまにさへ淋しさよする人の身なるか

手にすればその悲しさやいかならむ落ちし椿の花の紅

聖行のはてあるべしこはかなくも又かゝなべて人を待つころ

別れたる春ふゝたゝび逢ふ日かな峰を歩めばつゝち咲き咲く

河鹿なく宵闇河原初夏のさびしきものを教へけるかな

こゝ多き世には似たれささりけなくある日は山に卯の花を待つ

かぎりなき若葉青葉につゝまれてひこ日は鳥の輕さにも似よ

水の上は幾島山のみだれ深く我が住む國も色のよきかな

道ばたの松の一本に呼びかけむこの日淋しき旅の夕くれ

かへり見ばまよひさまよひ屍の冷たさ多き日頃なりしか